

ART

Taito-ku
Art Project
Archive
2008→2017

平成 23 年度



REPORT

企画

- 走って流して山ができた
- Ce Qui Arrive-これから起きるかもしれないこと
- “Drifting Images” 写真による日韓交流事業
- 紙芝居楽団うちゅうばくはつがくだんが贈る台東区の土地の記憶のファンタジー“光のカーニバル”の上演及び、新作紙芝居の制作・上演
- お囃子プロジェクト“DELUXE”— OHAYASHIで大騒ぎ— (P24)

短評

銭湯を会場に若手アーティストたちがインスタレーション作品を展示した企画『走って流して山ができた』や、夜の遊園地を舞台に現代美術や音楽などのパフォーマンスを披露した『Ce Qui Arrive』などが採択された23年度。その中でも日韓のアーティスト5名による写真展やワークショップが行われた『Drifting Images』は、日韓の文化交流を目的とした新しい切り口で、審査員一同がこの制度の新たな可能性を感じた年となりました。

ART

DANCE

MUSIC

DRAMA

OTHER



Title
走って流して山ができた

主催者
ポッシブロ

開催期間
2011.11.01—10

会場
梅乃湯



梅乃湯

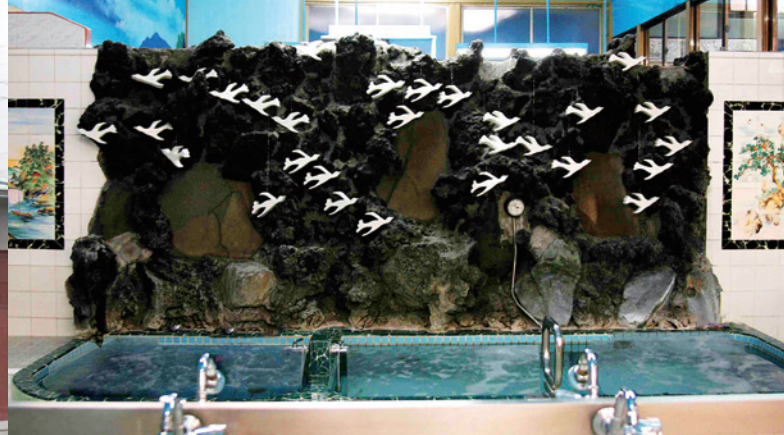
梅の湯にアートがやってきた。

『走って流して山ができた』展は、高田陽三・角田優・桑田朋以・中野岳・二藤建人の5名から成るグループ「Possiburo (ポッシブロ)」が、営業時間中の銭湯でインスタレーションやワークショップ、パフォーマンスを発表した企画です。風呂 (Furo) を展示可能な場にする (possible) という目標から、このグループ名を付けました。参加作家たちの作品は脱衣所や浴室に実際に展示され、銭湯は展示を見るために来場した人々と常連客と一緒に湯船に浸かりながら美術を鑑賞する場へと変わりました。この展示の企画者である私たちだけでなく他の作家たちも一丸となり、リサーチのため梅乃湯 (蔵前) へ約四ヶ月に渡ってお風呂の掃除をしに通いました。そして、銭湯の機能を奪わず展示を可能にするために、

日常における美術の必要性を日々自問自答し続けました。私たちは、経営難のため廃業が決定していた梅乃湯との出会いを通じて、汗水流して積み上げてきたそこでの歴史と日常性に目を向け、「その時」だからこそ表現できる企画や作品制作を目指しました。

【開催状況】

展示会の会場は、台東区蔵前にある銭湯・梅乃湯 (2014年廃業)。映画やドラマの撮影にもしばしば使われ、見事な富士山のペンキ絵で知られています。参加メンバーは、それぞれ「銭湯」や「富士山」などから着想を得た作品を発表しました。●角田優・高田陽三…「ここに何かありますか」(素材)ミクトメディア (設置場所) 男湯・女湯の脱衣所の鏡下、床に設置。



●中野岳…「富岳下着女湯」(素材) 下着・針金・洗濯物干し (展示場所) 女湯の脱衣所。●二藤建人…「洗い流せるものじゃない!」(素材) 布 (展示場所) 浴室内天井。●桑田朋以…「のうとり」(素材) 白磁 (展示場所) 浴室内の男湯・女湯を区切る岩場。●石川洋樹…「地上から30cmくらい浮いた所の話」(素材) 写真・糸・錘 (設置場所) 浴槽内。関連イベントも開催しました。梅乃湯を拠点として、街をマラソンしながらアートを体験する「アートマラソン」。参加者はゼッケンをつけ頭にはタオル、手には風呂桶を持って、富士山と同じ3776mの距離を走りました。「アイブ・イムダ・ダム」は、男湯と女湯のそれぞれで同時に行われたダンスパフォーマンスです。パフォーマーたちは、浴室を隔てる壁越しに声と音だけでコミュニケーションしながら、銭湯でしか成立しない身体表現を発表しました。そして台東入谷こども

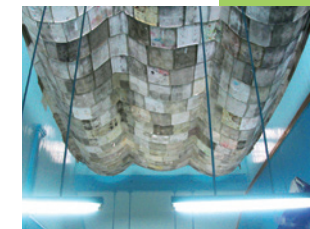
クラブにて、「アートマラソン」に使用する目印の三角コーンに絵を描く「自分の富士山を作ろう」というワークショップを行いました。最終日の深夜には、メンバーや梅乃湯のご主人ほか有志で、10日間に渡り展示会を行った、梅乃湯の大掃除を行いました。



掃除の様子

企画者からのコメント

不明瞭な点を客観的に指摘していただけただけで、早い段階で展示の主要な点を明確にすることができました。金銭の援助、制度の信用度などにより、専門家やワークショップを行った保育園からの理解と協力を得られ、展示を広く展開することができました。



二藤建人



石川洋樹



展示会ポスター

ART

DANCE

MUSIC

DRAMA

OTHER



Title
Ce Qui Arrive—これから
起こるかもしれないこと

主催者
一般社団法人日本パフォー
マンス／アート研究所

開催期間
2011.11.26

会場
浅草花やしき



浅草花やしき

最先端のパフォーマンス・アーティストたちによる、 ライブイベント

2011年3月11日の東日本大震災と原発事故以来、この國の盤石と思われていたシステムが大きく揺らぎ、人に対する信頼がもろくも崩れさってしまった。この現実を目の前にして「芸術にながができるのだろうか?」などという愚かな設問は設定しない。また、チャリティとしての芸術表現や癒しとしての芸術表現ともこのイベントは一見無関係を装っている。しかし、優れた表現者はカート・ヴォネガットの言う「炭坑のカナリア」であるとするならば、今回の事態は事前に予測されていたのではないだろうか。今回出演していただくアーティスト達は偶然にもそのような人達だったのではないかと考える。何故ならこのイベントは震災以降にプランニングされたものではなく、震災以前より粛々と準備されており、出演者のラインナップはすでに決定

していたのである。本イベントのタイトル「Ce Qui Arrive / Unknown Quantity」は、「文明は事故を発明する」と喝破した、テクノロジーと速度の思想家、ポール・ヴィリリオの著作及び展覧会コンセプトから多くのインスピレーションを受け引用されている。

【開催状況】

浅草にある日本最古の遊園地「浅草花やしき」を閉園後に貸切り、開催しました。観客には、赤か青のリストバンドと各パフォーマンスの時間と場所を示したマップが配布され、プログラムの時間に合わせて、閉園後の夜の園内を移動。園内の様々な場所で、様々なアーティストによるパフォーマンスが開催されました。●悪魔のしるし(搬入プロジェクト)演出家危口統之を中心に演劇などを企画・上演する集まり。作業員の格好



をしたメンバーが、オブジェを担いで園内を移動。●サンガツ(バンド演奏・映像)アルバム「サンガツ」(ジム・オルークのプロデュース)で2000年デビュー。●和田永(バネギター)1987年生まれ。古い電気機器とコンピュータ、各種生楽器を組み合わせた音楽作品・パフォーマンス作品を制作。●足立喜一郎(ジャイアント・モラー)2004年に多摩美術大学環境デザイン科を卒業した後、より自由な表現を求めてアートへと発表の場を変える。●伊東篤宏+contact Gonzo(蛍光灯を使用したノイズ演奏+格闘技的パフォーマンス)「contact Gonzo」とは、人と人との間に起こる接触というシンプルな物理現象に起因する様々な瞬間的な事象を通し、自らにとっての「世界の仕組み」を紐解こうとする方法論のこと。またその方法論を扱い、応用する集団の総称。伊東篤宏さんは1965年生まれの美術家で、OPTRONプレーヤーとしての一面も持つ。90年代より蛍光灯を素材としたインスタレーションを制作。2000年以降、国内外の展覧会、音楽フェスティバルなどからの召集を受け、世界各国の展示とライブ・パフォーマンスを行っている。●久保田弘成(インスタレーション)1974年生まれ。武蔵野美術大学大学院修了。国内外にて個展、グループ展に多数参加されている。

なお、この日は花やしきさんのご厚意により、3つのアトラクションが稼働し、イベントの最中に乗ることで出来ました。夜の幻想的な遊園地の雰囲気、観客の気分も盛り上がっていました。

企画者からのコメント

ここ数年、いわゆる「地域アート」で街おこしを望む自治体が急速に増えている。先行する台東区は助成金制度の開始から10年を経て、なぜ芸術に助成するのか、しなければならぬのか、今一度足を止めて熟考するべきではないだろうか。本助成制度の認知度がいまひとつ低いのは、審査員に専門家がいないからだと思われる。審査される側の方がアートの現場を知っているのではないか。助成事業のクオリティをあげていくのなら芸術の専門家を審査員にするべき。また、若手に支援するのは素晴らしいことだが、であるならばプロジェクトを一定の継続ができるようシステムを変えるべきだろう(複数年助成システムなどルールを作る)。単年度の助成では若手は育たない。才能の使い捨てに終わる。台東区の賑わいを出すために芸術に助成をする時期は終わっている。今後助成事業を継続するのであるのなら新しい時代にあった助成のコンセプト作りと、システムの大幅な変革を望みたい。



悪魔のしるし



足立喜一郎



チラシ

ART

DANCE

MUSIC

DRAMA

OTHER



ギャラリー Lucita Galleryでは、中里和人が江戸時代の幻燈機を復元。さらに、当時の町民たちが楽しんだという江戸カラクリ絵図を夜会のなかで再現しました。同時に日韓アーティストと観客が交流を行うトークイベントが開催されました。



ポストカード講評会

Title
“Drifting Images”
写真による日韓交流事業

写真による日韓文化交流プロジェクトの集大成

主催者
Art Autonomy Network
[AAN]

開催期間
2012.01.14—03.10

会場
マキマサル・ファインアーツ、
Art Lab AKIBA、LwP
asakusa、Lucita Gallery



Art Lab AKIBA

写真がこの世に誕生してから、既に約175年(2012年当時)経ちます。ある意味で、写真はすでに古臭い過去の発明であり、驚きの存在として捉えることは難しいといえるでしょう。しかしアジアでは写真家を志す人々は無数に存在します。そのため、優れた写真家が生まれる可能性が無限大にあるといえます。その背景には、アジアにおける撮影機材や技術といったハード面の発展が目ままいことがあげられると思います。とはいえ、ハードだけが先行しても写真芸術が進化するわけではありません。優れた写真が芸術へと開花するためには、もっと先鋭な表現となる作品や活動を推進していくべきだと考えています。今回の『Drifting Images 日韓交流写真展』は、Art Autonomy Network(AAN)と韓国・ソウルのアートセンター

BODAがタッグを組み、2011年8月より進行してきた写真による日韓文化交流プロジェクトの集大成となりました。

【開催状況】

浅草橋にある2つのギャラリーを会場に、日韓5名による写真作品を展示しました。第1会場のマキマサルファインアーツには韓国人アーティスト、スンミン・カンの「Asakusa」や、ジンウォン・ホンの「Real or Rear “現実と裏側”」を展示。ほかにも、中里和人の「R korea」、大串祥子の「Brazilian Ju-Jitsu」、栗山斉の「.:0=1—trace of light and heat」・「.:0=1—light from the earth:seoul」、韓国ソウルと浅草で開催した写真ワークショップ参加者の作品など、多数の作品を展示しました。第2会場のArt Lab

AKIBAでは運送会社の駐車場奥に設けられたギャラリースペースにて、中里和人の「R korea」、栗山斉の「.:0=1—light from the earth:Seoul」の大型作品を展示しました。「ASAKUSA 写真観光」というワークショップでは、東京造形大学教授の中里和人氏を講師に迎えました。浅草観光をテーマに、浅草のまちを散策しながら撮影した写真をもとに、ポストカードを制作。制作途中に特別講評会を開催し、韓国アーティストによる手作り料理による交流会を実施しました。また、浅草橋にある古民家



展覧会準備

企画者からのコメント

支援制度を受けたことにより、会場を区内に確保することができました。本事業のために使用可能な公共スペースがなかったので、複数の小さな民間施設を利用することになりました。今後は可能であれば、過去の会場をリスト化して、その後の支援事業でスペースを借りやすいようにしてほしいと思います。広報としては、台東区巡回バス「めぐりん号」にアーティストの写真ポスターを4種類掲示できたことが良かったです。企画で広がったネットワークを活かして、その後のアート活動を継続しています。特に会場のひとつでは別企画の展覧会を開催することができました。また、本助成金の資金とは別予算を確保して、活動記録をまとめたアーカイブ冊子を制作しました。今後は、大学授業や事例発表をする機会を通して、さらに広く発信していきたいと思っています。



写真展チラシ



ソウルBODAでの展覧会レセプション

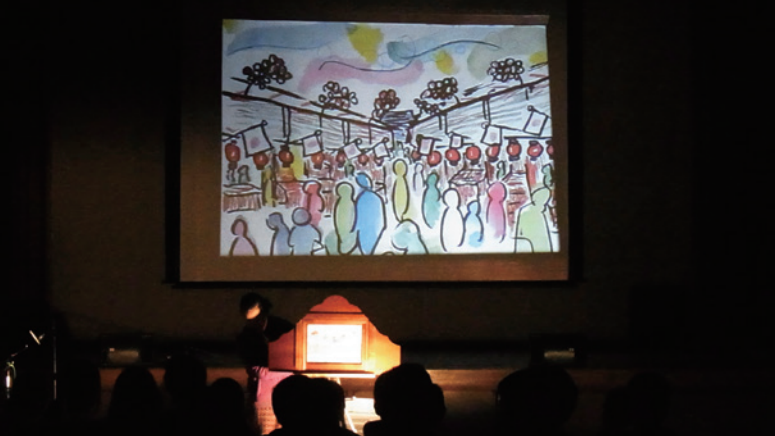
ART

DANCE

MUSIC

DRAMA

OTHER



語りに加えて、様々な民族楽器で奏でる幻想的な音楽にのせて、物語を紡ぎました。また、一般公開として無料の上演会を生涯学習センターアトリウムとゲスト出演という形で浅草公会堂「東京大空襲写真展」の2会場で披露しました。



千束小学校公演の様子

Title

紙芝居楽団うちゅうぱくはつがくだんが贈る台東区の土地の記憶のファンタジー“光のカーニバル”上演、及び新作紙芝居“地球の唄のこだまが響く”の制作・上演

物語を音楽にのせてお届けする紙芝居楽団

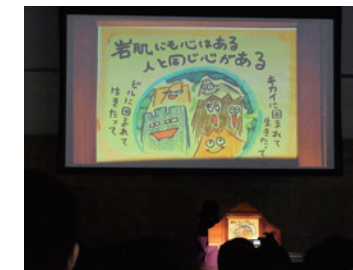
『うちゅうぱくはつがくだん』は、物語を音楽にのせてお届けする紙芝居楽団。2010年夏から、東京大空襲の時代の浅草を体験した住民の方の声を取り入れた紙芝居を制作、同作品を発表するプロジェクトを展開し、人の中にある土地の記憶を未来につなぐことを目指し活動しています。民族楽器を使いながら繰り広げられる紙芝居の公演を、区立小学校や公共施設で開催。上演される作品は浅草界隈を舞台に、東京大空襲の体験を題材にしたファンタジー『光のカーニバル』と、東日本大震災をうけ地球や命の大切さについて考える新作『地球の唄のこだまが響く』の2作品です。子どもたちが紙芝居を通して戦争の記憶を体験・共有することで、子どもたちの考え方を培っていくことを期待しています。「ぐうぜん」生まれる音や

色を響かせながら、現実世界の扉からお客さんたちを連れ出して、星屑きらめくファンタジックな世界へと導きます。サーカス団のような、オーケストラのような、われわれストーリーテリング一座は、語りを紡ぎながら、虹色世界の絵師、異次元のミュージシャンらが、3Dの音像を心の宇宙に描きだします。『光のカーニバル』の舞台は浅草。退屈な毎日を送っていた登校拒否児の美幸が、不思議な中年の奇術師に出会い、幻想的な奇術を見せられるところから物語が始まります。首をかしげる美幸に、中年の奇術師が残っていたのは、謎のかけられた一枚の地図。そこには×が3つつけられていて、「川の精」・「木の精」・「土の精」の文字が。この三カ所を退屈しのぎに、探偵気分、猫の銀次とのお散歩がてらにまる

ことにした美幸。その地図めぐりを通じて、美幸は恐ろしい世界を体験することになります。美幸の身には想像を絶することが起こり、ついに奇術師の地図の謎が解き明かされます。その謎とは、日本人すべてが忘れてしまっている歴史上の出来事だったのです…。新作は『地球の唄のこだまが響く』という作品です。少年ハヤテは大木の唄にさそわれて、大自然の世界へ。空をかけ、土に転がり、水に浮き、火と遊び…。不思議なメガネを探しながら様々な唄声に出会うハヤテが、最後に発見する驚きの宝物とはいったい何なのか。その秘密が今、目の前へと姿をあらわします。

【開催状況】

平成小学校・千束小学校・田原小学校の在校生を対象に、区立小学校では全3回の公演を開催。遠くからでも絵が見られるように、紙芝居をプロジェクターに投影して行いました。



田原小学校公演の様子

企画者からのコメント

支援制度を受けたことにより、地元の方々に対する信用度が向上し、告知などがスムーズに出来ました。アドバイザーの方をはじめ、職員の方々の手厚いサポートも企画を運営するにあたって非常に助かりました。企画後も毎年、3月10日には浅草神社の境内をはじめ、浅草近隣で紙芝居を上演させていただいております。楽団の活動としては、主に年一回のツアーとなっておりますが、参加メンバーは様々なフィールドで活躍しています。



チラシ



メンバー



生涯学習センターアトリウム